

私と川との関わり

The Relationship between Me and River



(一社) 東北地域づくり協会
専務理事

み うら きよ し
三浦清志

Kiyoshi MIURA

1. はじめに

幼かった頃、近くの川などで遊んだ思い出と、国土交通省（採用時は建設省）へ入省し、河川系職員としての川との関わり、その後退官し、現在に至るまでの川との関わりについて、主に、青森県津軽地方を北へ流れる一級河川岩木川を中心に、脳裏に残っていることについて、殆ど網羅的で、まとまりのない文になることをお許しを頂き、ペンを進めたい。

2. 小学校から高校までの岩木川との関わり

岩木川の中流部（弘前市）で生まれた私の当時の夏休みの遊びは、水遊び（水泳、釣り等）と、カブトムシやカマキリ等の昆虫採取だった。

幸い岩木川は、自宅から歩いて10分～15分の所に本川が流れており、すぐ目の前には支川うしろながねがわの後長根川や用水路とんげんせきの土淵堰があった。休みには、最も近い土淵堰か、後長根川で水泳をし、もう少し冒険をしたい時は、岩木川で水泳をし、川原でのイベントを楽しんだ。イベントとは、川原近くの畑からジャガイモを調達し、川で獲れたカジカと一緒に鍋で煮込み、それを、仲間と一緒に食すのである。2、3つ年上の先輩が、僕たち後輩に現地採取として、ジャガイモの調達を命じたりした。相当なスリルがあった。カジカは、当時結構な数が生息しており、「押し枕」と称する漁法で、膝下ぐらいまでの浅瀬の下流側で網を構え、柳の枝等を束ねた、所謂、長い枕のような物を拵え、下流へ押し込み、カジカを一網打尽するというやり方である。そのカジカとジャガイモを、持参した味噌で鍋で煮込み、皆で食べるのである。無論、水は岩木川の水、燃料は川原に転がっている流木である。この昭和30年代初めは、一般家庭の生活において

も、川との距離はとても近かった。例えば、母の洗濯はもっぱら近くの土淵堰であった。生活にとっても、なくてはならない「川」の存在であった。〈写真—1〉



〈写真—1〉よく遊んだ岩木川

一方で、大きな洪水の経験もした。幸い自宅は、地形的には岩木川に比べて、10メートル程度高い所にあり、直接的な被害はなかったが、昭和33年8月洪水、昭和35年9月洪水等、怖い思いもした。特に小学2年生の時の33年8月洪水は、やや上流の弘前市街地（弘前公園を含んでの広い範囲）が浸水〈写真—2（1）、（2）〉し、担任の先生の自宅が大きな被害（床上浸水）を受け、父兄たちがカンパした。

中学、高校は、野球少年として部活動に没頭した時でもあり、また、少し大人になる頃でもあり、小学生の時のように、岩木川で遊ぶ回数も減った。川では適当な場所がなくなったこともあり、夏休みの水泳は、日本海沿岸まで行き、海で泳ぐようになった。



〈写真—2〉(1)
洪水氾濫により冠水した弘前公園の状況
昭和33年8月12・13日洪水 弘前公園内



〈写真—2〉(2)
弘前公園西濠
昭和33年8月12・13日洪水 弘前公園春陽橋

そのような中で、中学の時だが、悲しい現場に遭遇した。他校生が砂利採取跡地の深みで水死したのである。水深3～4メートル程度の、水の澄んだ小さな池のような所である。私も経験したが、底は湧き水のように、水温が相当低い。表面は温かいが、知らないで潜ると心臓麻痺とかが起こり得るのである。親たちが言う、「川は危ないぞ、川では遊ぶな」の所以かとも思う。

高校時代は、最後の夏の甲子園青森県予選も、2回戦で敗れ、夏休み以降は部活動がなくなり、午後4時前後には帰宅出来た。就職はまだ決まっておらず、不安な時でもあったので、近くの後長根川、土淵堰で釣りをし、気分を紛らわしていた。釣果としては、フナ、ハヤ、オイカワ等であったが、それを母に唐揚げ（油で揚げたのみ）にしてもらい、昼食のおかずとして、弁当箱に詰めていき、級友に振る舞った。皆は、物珍しさに、結構飛びついた。

3. 国土交通省（建設省）での関わり

当時の建設省に就職したのが、丁度50年前の昭和44年だった。平成20年4月退官するまで、39年間を河川系を主体に異動し、沢山の部署で様々な行政経験をさせて頂いた。幸い、転勤運にも恵まれ、昭和55年から60年まで、河川局河川計画課に勤務し、全国の一級水系109の名前と、位置関係もほぼ覚えた。そのお陰で、東北以外の他地方の河川に関わる事柄についても、少しばかりではあるが、話しについて行くことが出来、想像を巡らすこともある。

自宅を、青森市に構えたので、单身と帯同生活を繰り返してきた。

地元の青森河川国道事務所に勤務すること4回。岩木川、馬淵川の管理を担当したことから、思い出も多い。

岩木川下流部の出張所長（五所川原）の時のことであるが、幾つか述べてみたい。当時（平成4年）河川も道路も、行政展開を国民に広く知って頂き、理解をして頂くためにイベントを行っていた。岩木川としても行った。降雨体験装置での時間雨量の体験、土木工事重機との触れあいコーナー、洪水の歴史・改修の変遷等のパネル展示、集客の意味合いも込め、漁協の協力を得ながらの河川敷での釣り大会等々、大いなる賑わいを見せ盛況だった。地元市町村も協力的で、とても喜んで頂いた。

〈写真—3〉



〈写真—3〉 河川祭りの会場（広い河川敷）

河川愛護月間中の行事である「一日河川パトロール」も記憶にある。どのようにしたら大人はもとより、子供たちにも岩木川へ関心を持って頂けるか？ 少し考えた。「よし、奥様方、ご婦人方にパトロールして頂こう！」と。後の効果のほどは、フォローもしていなかった

め定かではないが、河川管理者の地味？な普段の管理行為の一端でも理解して頂き、当日だけでも良いから、子供たちやご主人との、夕食時のひとときの話題になれば、と思ったものである。色々あるが、「川は地元のもの、財産であり、管理者は、それをお預かりしている」との精神が大切だと思っている。

ある時、近くのおばあさん（70歳過ぎ？）が出張所を訪ねてきた。お茶を出し、話を聞いた。聞くと、河川敷（官地）に野菜畑を耕作させて欲しいとのこと。許認可行政には、様々な経緯・歴史があり、やむなく許可しているところもあるが、場所的にも、要望を受け入れることは出来なかった。そのことを詳しく丁寧に説明し、帰って頂いた。おばあさんは、納得の様子だった。「物事、断るときほど丁寧に」である。

その後、五所川原出張所を離れ、5年後、同事務所の副所長として赴任した。待っていてくれたのは、「岩木川治水80周年」の記念式典だった。準備に結構な時間を要した。岩木川改修工事発祥の地、五所川原市の会館を会場としての約半日の式典であった。メインイベントは、識者によるパネルディスカッションであり、当時（平成10年）河川法改正直後であり、治水、利水に加えて、「環境」が柱として位置づけられたこともあり、岩木川の治水に苦勞された、地元の古老の町長さんをはじめ、江戸川区の土木部長さん、四万十川のNPO法人の代表者等にパネリストになって頂き、「地域づくり川づくり、そのあり方を探る」をタイトルとし、催した。式典が始まったときの感慨深さは、今でも忘れられない。〈写真—4〉



〈写真—4〉 岩木川治水80周年パネルディスカッション

4. 防災エキスパートとして

前述のように、平成20年4月に退官し、その後、今の職場に勤務しているが、これも岩木川に関わることだが、平成25年9月、岩木川が洪水〈写真—5〉となり、防災エキスパート（阪神淡路大震災を契機に、平成8年



〈写真—5〉 平成25年9月洪水の岩木川

2月に創設され、主に国土交通省OBで構成されている技術支援制度）として現地へ赴いた。

9月16日夜11時過ぎ、場所は、以前務めていた五所川原出張所だった。職員3名（所長、係長2名）と協力会社の社員2～3名がいた。私の担務は、現場の水防団への指導だったが、実際は、経験を基にした指揮・命令に近いものだった。具体的には、堤防法尻からの、漏水対策としての水防工法の選択と、それをどこに、どのように行えばいいのか、の判断であった。自分が勤務した地の利を活かし、水防団に、国土交通省OBであることを伝え、実施した。時計は、夜中の12時を回り、日付は17日となっていたが、そこに大先輩であるNさんが来てくれた。N大先輩は、岩木川での勤務も長く、現場経験が豊富であり、且つ専門的知識もあることから、「岩木川の生き辞引き」とまで言われている方であり、本当に心強かった。

5. おわりに

幼い頃から、建設省に就職するまでは、近くの用水路とか、岩木川でよく遊んだ。歌、「ふるさと」の歌詞にあるように、「兎追いしかの山、小鮒釣りしかの川」である。

その後、全く想像できなかったが、河川行政に携わることとなり、これまで、岩木川はもとより、全国の川とも関わりを持たせて頂いた。

今、国土交通省の職員は、国民の多様な要望と、意識の高い、ハイレベルな要望に応えながら業務執行をしている。職員が少ない中、なかなか大変なことと思う。河川系を歩ませて頂いたOBの一人として、少しでも現役職員の皆様方のお役に立てるよう、心していくつもりである。

職員の皆様方のご活躍を祈っている。